

# 音楽する喜びを、子どもと教師が共に味わう授業づくり

荒井 志穂 教職基盤形成コース

キーワード：音楽する喜び，歌う理由<sup>わけ</sup>，教師の「観」

## 1. 問題の所在と研究の背景

自身の大学時の教育実習で経験した音楽の授業を振り返ると、教師にとって都合の良い子どもの発言や表現を取り上げ、指導案通りに授業を進めることに懸命だったことが思い出される。一方、幼いときから音楽に親しんできた自分自身は、自分なりの解釈で思いを込めて演奏することに喜びを感じていた。この音楽体験と、教師として音楽の授業を行うこととは全く別のものだと捉えていた。こうした授業に対する自身の捉え方に違和感をもつようになったのは、ある全校音楽(\*)を参観したことがきっかけである。この全校音楽はこれまで自身がイメージしていた教師主導のものではなく、子どもも教師も共にのびのびと表現し合う姿があり衝撃を覚えた。学習指導要領音楽科の目標では、「音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。」ことが述べられているが、この全校音楽の参観を通して、音楽に対する感性を豊かにするためには、表現の根本となる、子どもが自ら音楽を感じ取り内発的な音楽活動を通して音楽する喜びを感じるということが重要ではないかと考えるようになった。これらの点から、「音楽する喜びを、子どもと教師が共に味わう授業づくり」をテーマとして子どもを中心に据えた授業を参観し、教師はどのように子どもと向き合い、何を大切に指指導しているのかを明らかにし、自身の授業実践で具現化したいと考え研究をすすめてきた。

## 2. テーマ具現化に向けて

### 2.1 音楽するとは何か

自身の音楽経験を通して、音楽する楽しさや喜びは、他者から与えられるものではなく、内発的な活動の中に生まれると感じてきた。これは学校の音楽の授業においても本質的には変わらないのではないかと考える。斎藤喜博は、「音楽は（中略）訓練されるようなものではなく、（中略）音楽によって自分たちの喜びや悲しみや怒りや考えを、深い人間的感動をもって表現し、他に訴え、他と交流し、自分やみんなの心を充足させ変革させていくようなものである。」と、音楽することを、人として生きること重ねて述べている。また、三善晃(1995)は、「歌う」とき、つまり「音楽する」とき、私たちはそこに全人的な「現存」を関わらせている。《私が歌う理由<sup>わけ</sup>》とは、「私が生きる理由<sup>わけ</sup>」のことではないか。」さらに、「外から中に入ってくるもののために、私たちの内部がたえず流動する。流動するからこそ私たちは一人ひとり自分として生きているのだ。」と述べている。このように、

「音楽する」とは、子どもが音楽と出会い、音楽がその子の感受する世界の中で、新たな価値を生み出し、内から表現となつてあふれることであると捉えることができる。そして、この過程の中に、三善晃が言うように、全人的な現存、つまり生きる実態を伴う音楽する理由<sup>わけ</sup>があり、喜びがあるのではないかと捉えた。

## 2.2 音楽する喜びのある授業 -2つの授業から-

テーマに迫るための視点を導き出した2つの実践を参観した振り返りを以下に記す。

### (1) N小学校 H教諭の全校音楽(※)(2016/05/28)

私の経験してきた音楽集会とは全然違う。こんな形の音楽集会があったんだ…！どうしてこんなに、子どもたちも先生も、生き生きと音楽を楽しんでいるのだろう。

楽曲『てをつなごう』を歌う場面で、子どもたちは、一人ひとりが楽曲を心で感じ取り、音楽に合わせて体を動かす姿や、楽曲に自らの思いをのせて歌う姿。そして、その中で教師は、子どもたちと同じ立場で一緒に楽曲を味わう姿がみられた。この瞬間、自身の考えていたこれまでの学校音楽の授業像、また、教師像が変化した。

### (2) M中学校 A教諭の授業参観から(2016/11/11)

A先生と生徒たちが作り出している空気感は、何とも言えない安心感があって、参観している私も幸せな気持ちになれる授業だった。

自らの思い描く『かえるの合唱』を、アーティキュレーションを用いて、アルトリコーダーで演奏する授業を参観した時、中学生が音楽を楽しむ姿に衝撃を受けた。自身の経験から、中学生は音楽の授業で意欲的ではないイメージであったが、この授業では、誰一人として演奏しない子はおらず、個々の表現を教師も子どもも共に味わう姿に感銘を受けた。

上記の(1)(2)を通して、この2人の教師は、校種は違うものの私の考えるテーマを具現化していると捉えた。そしてこれらの実践は、どのように授業として構成され、授業を構成する教師がどのような考えに基づいて指導・支援をしているのか探っていきたいと考えた。

## 2.3 H教諭とA教諭の授業実践の背景

H教諭の省察の分析や、A教諭への取材から見えてきた実践の背景として、本研究にかかわって特に重要だと考えられる3点を挙げる。

- ① 子どもの個性的表現の尊重と音楽的要素を踏まえた環境構成
- ② 子どもの内にある願いの醸成とそれに対する技能的支援
- ③ 子ども理解を基盤にした授業づくり

## 2.4 H教諭・A教諭の実践から導き出した研究の視点

テーマに即した授業の基盤となる教師の考え方(観)及びその内容について、下記の観点を導き出した。

- ① 『子ども観』…元来子どもは、音楽(表現)をしたい存在である。そして、“こうなりたい”という憧れや、“上手くなりたい”という願いをもっているものである。

- ② 『音楽観』…表現は個々自由なものであるという考え。(しかし、何でも良いわけではない。)子どもたちにとっての音楽は、日常生活にあふれているもの。
- ③ 『指導観』…教師は、一緒に授業をつくっていく立場。子どもから出てきた意見や問い、つぶやきなどを全体に共有して授業にしていく。スモールステップで、どの子どもその子自身の願いに近づいていけるような工夫。
- ④ 『教材観』…全員が、できる・やりたい・知りたい、を実感できるような教材化を行なう。自分自身が、取り扱う教材についてどのように考えているのかを明確にする。

### 3. 音楽する喜びのある授業を目指して -4 観点を踏まえた実践の試み-

#### 3.1 Y中学校での実践 -『大地讃頌』-(2017/06/14)

本実践では、子ども観と教材観の点から、「たたえよ」「ほめよ」という歌詞について考える場面の中で、作詞者の思いや曲の背景に触れたとき、生徒たちが「もっとこう歌いたい」というイメージをもてるような写真を教具として提示した。そして、子どもたちがもったイメージを表現するために、教師の教材観から捉えた音楽的要素を踏まえつつも生徒個々が自らの内にあるものを、工夫し表出していく過程に配慮して授業を実践した。

この実践から示唆されたことは、4観点は1つずつ独立しているものではなく、複数の観点で関わり合いながら授業の中で生きてくるということである。歌へのイメージを子どもが表現する過程では、子ども観と共に教師の音楽観も同時に変容し、また、授業の構成にも必要な指導観も関わってくると考えたからである。

#### 3.2 N中学校での実践 -『フーガ ト短調』-(2017/10/17)

本実践では、主に教材化を工夫して授業構成を行った。主題がどのようにくり返されているのかを、自分の気づきを記しながら調べる活動を通して、子どもたちがフーガ形式のすごさや美しさを感じ取りながら能動的に鑑賞するのではないかと考え授業実践した。

この実践から考察したことは、フーガの特徴を教えることに集中してしまったが故に、子どもの自由な表現を受けとめられていない自分がいた。しかし、想定外の子どもの表現に触れたときに、自らの教材に対する捉えが変わり、新たに教材に出会い直したような気持ちになった。これは、私の中で固定化していた教材観が、子どもの表現を受けて、新たな教材観に更新したと考えられる。つまり、教師の題材における教材観は、授業前に完結するのではなく、授業の中で更新し続けていくのではないかと捉えた。

#### 3.3 Y中学校での実践 -『魔王』-(2017/11/17, 2017/11/22)

本実践では、CDで音から情報を得て、そこからDVDを鑑賞したり、CDでの聴き分けを行ったりすることで、徐々に物語の本質のところまで考えていけるような授業構成の工夫を行った。また、父、子、魔王の声の高さや強さ、音色の違いを聴き分けながら鑑賞することで、音楽的要素に気づきながら、『魔王』という物語を、子どもたちが自分なりに思い描きながら聴くことができるのではないかと考えた。

また本実践では、全3回、同じ題材を違うクラスで実践し、比較検討しようと考えた。

本実践の1回目では、時間配分の関係で、聴き分けて感じたものを共有するところまでできなかつたが、鑑賞の観点として、声の高さや強さ、音色の特徴などを段階的に習得できるような工夫を行うことで、自分なりに魔王の物語を描き出し伝えにくる子がいた。自分はこの姿を、内発的に鑑賞できている姿だと捉えた。このことから、音楽的要素（技能・内容）が子どもの関心に即しながら段階的に習得されることの重要性を感じた。そして実践3.2の時と同じく、教師の題材に対する捉えの更新があることが分かった。なぜなら、子どもの描き出した魔王に触れたとき自分の教材観が変容し、この子の物語と一緒に味わいたいと思う自分がいたからである。そして、このようなやり取りの中で、子どもと一緒に音楽する喜びを味わうことができたと感じた。このことから、子どもの表現や思いに即して教師がそれに合わせて対応し瞬時に授業を再構成していくことが重要であると捉えた。

#### 4 まとめ

『音楽する喜びを、子どもと教師が共に味わう授業づくり』というテーマで研究をしてきたが、実践を通して、研究の視点とした「子ども観」「音楽観」「指導観」「教材観」の4観点は1つずつ独立しているものではなく、複数が同時に関わり合って授業の中で生きてくるものだというのを学んだ。そして、音楽する喜びのある授業は、子どもの関心に注目しがちであるが、音楽的要素の習得がその基盤となっていることが明らかとなった。それは、子どもたちの個性あふれる表現は、音楽的要素（技能・内容）が子どもの関心に即しながら段階的に習得され、それを十分に表現できる場を教師が保証していくことで、具現化されていくということである。本研究の出発点は、自身の教師主導型の授業からの脱却であったが、実践研究を通して、一見教師主導に見える授業でも一概に否定するものではないと考えを新たにした。

教師主導型の授業も、段階的に音楽的要素を盛り込み表現に繋げようとする一つの授業の形として意味づけられるのではないかということである。大切なことは、授業の型式ではなく、授業を実践する教師が、例えば①授業の中で現れる子どもの表現や思いをどう受け止め、それに応えていくか、また②教材を固定的に捉えるのではなく、授業の実際の中で教師自身が教材に対する捉え方をどのように深めていけるか、といった教師の在り方だと考える。このような教師のもとで、「音楽する喜びを、子どもと教師が共に味わう授業づくり」が具現されると捉えた。

#### 文 献

- 文部科学省(2008) 中学校学習指導要領解説 音楽編 p.10  
齊藤喜博 自己表現としての音楽 野村 幸治・中山 裕一郎 編(1995)音楽教育を読むー学生・教師・研究者のための音楽教育資料集 pp.137-143,音楽之友社  
三善 晃(1995) 音楽の表現と教育 佐伯 胖・藤田 英典・佐藤 学 編(1995)表現者として育つ [シリーズ「学びと文化」5] pp.1-41,東京;東京大学出版会